ブルーノ・タウト設計による
オンケルトムズヒュッテの住宅団地

(Waldsiedlung Onkel Toms Hütte)

田中　辰明
お茶の水女子大学
名誉教授(生活環境教育研究センター)

柚本　玲
お茶の水女子大学
田中辰明研究室

㈱工文社　月刊建築仕上技術　2009年3月号より

■ 寄 稿 ■

ブルーノ・タウト設計による オンケルトムズヒュッテの住宅団地

(Waldsiedlung Onkel Toms Hütte)

お茶の水女子大学
名誉教授(生活環境教育研究センター) 田中 辰明

お茶の水女子大学
田中辰明研究室 柚本 玲

はじめに

本誌平成20年12月号でユネスコの世界文化遺産に指定されたブルーノ・タウト設計による4つの住宅団地の紹介を行った[1]。この4つの住宅団地がタウトの代表作かと言うと必ずしもそうではないであろう。高く評価されているタウト設計の住宅団地にはベルリンのツェーレンドルフ(Zehlendorf)地区のオンケルトムズヒュッテ(Waldsiedlung Onkel Toms Hütte)の住宅団地がある。

筆者は1971年～1973年ベルリン工科大学の研究所に在籍していた。ベルリンには有名建築が多数存在することから、よく日本からの来訪者があり、ベルリンの建築を案内するということがあった。多くは筆者が設定する3時間コース、半日コース、1日コースという内容でご満足頂いた。しかし大学時代に集合住宅論を教授していただいた武基雄先生が1972年に来られたときは全く異なった。先生自らが「これを見たい」といわれ、それがオンケルトムズヒュッテの住宅団地であったのである。この団地は筆者のドイツ人の友人も住んでおり、よく出かけたこともあったが、うかつにも特に気にかけた住宅団地ではなかった。しかし武先生によるとこれがブルーノ・タウトの代表作であるとの事、ご案内したときにはある集合住宅の前で「捜し求めていたものにやっと出会えた」という風情で茫然として立っておられ、筆者が「この人はどうなってしまわれたのか？」と心配をした事を懐かしく思い出す。ご案内した夜、武先生はベルリンの筆者の自宅を訪問され、ブルーノ・タウトの事をいろいろ説明してくださった。ブルーノ・タウトは早稲田大学の建築学科でゼミを行い、武先生がそれに参加されたこと、他のところで行われた講演にも追いかけて行き、話をお聞きになったこと、通訳は早稲田建築学科の先輩でタウトを日本に招いた上野伊三郎であったこと、その通訳が実に的確で素晴らしかったこと等。それ以来筆者もタウトの建築に興味を持ち、ベルリンに残るタウトの作品を写真に撮り続けて今日に至っている。特にオンケルトムズヒュッテの森の団地はブルーノ・タウトの最も円熟したときの作品といって良いものである。

表1 オンケルトムズヒュッテの概要

建設年	1926－1931
所在地	Berlin Zehlendorf, Argentinische Allee,Onkel Tom Straße, Sprungschanzen Weg, Holzungsweg, Fischtal
状態	保持されている。
共同設計者	造園建築家 Leberecht Migge,Martha Willingd-Göhre
所有者	GEHAG,一部個人所有
発注者	GEHAG並びに個人
居住形態	総住居数1915戸、その内1592戸はブルーノ・タウト設計、さらにその内1106戸は集合住宅、486戸は小規模集合住宅
建築家	Bruno Taut,Martin Wagner
建設工期	Ⅰ/Ⅱ期:1926-1927 Ⅲ/Ⅳ期:1927-1928 Ⅴ期:1929-193 Ⅵ期:1930-1931 Ⅶ期:1931
変更	1970年代に記念建築物を意識した再建が行われた

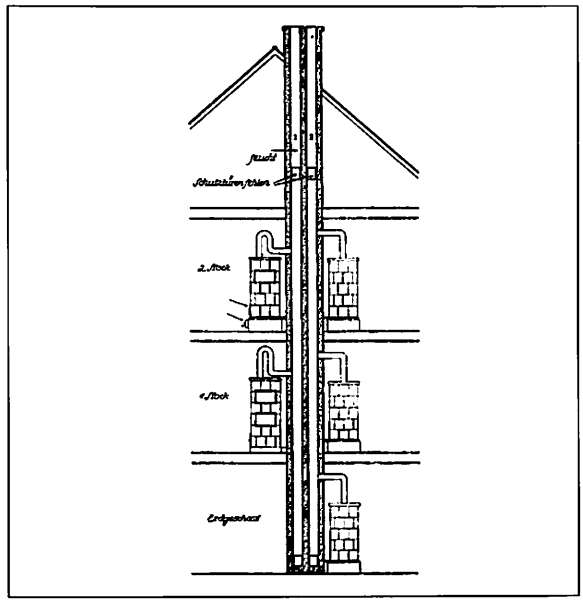

図1 1927年当時のカッヘルオーフェンと煙突の関係

1．オンケルトムズヒュッテ (Waldsiedlung Onkel Toms Hütte)の概要

表1にオンケルトムズヒュッテの概要、図1に団地の配置図を示す。

この住宅団地はベルリン市の西郊のオンケルトムズヒュッテにあり、ベルリン市の中心部にあるヴィッテンベルグプラッツ(Wittenbergplatz)とクルメランケ(Krumme Lanke)を結ぶ地下鉄(U-Bahn)の終点クルメランケの一駅手前にある。その地下鉄駅の名前がオンケルトムズヒュッテであり、この駅を挟んで南側と北側に住宅団地が展開されている。開設当時は全く郊外の緑の森グリーネヴァルト(Grunewald)に隣接する未開発の土地であった。タウトは住宅団地に商店を設けなかったが、地下鉄オンケルトムズヒュッテ駅の線路に沿って商店街を設け、住人の便宜を図った。まさに駅中商店の走りであるが、今日もその商店街は所有者こそ代わっても面々と続いて雑貨屋、花屋、お土産や、文房具屋、菓子屋、八百屋、コーヒー店などが営業をしている(写真1、写真2)。

写真1　地下鉄オンケルトムズヒュッテ駅

写真2　オンケルトムズヒュッテ駅の駅中商店街

本誌平成20年12月号でご紹介したブリッツ(Britz)の馬蹄形住宅団地が着工した1年後、1926年にベルリン市住宅供給公社ゲハーグ(GEHAG)がマルチン・ヴァーグナー(Martin Wagner)と共に次の大規模住宅団地計画を興した。これがオンケルトムズヒュッテの森の住宅団地である。ヴァイマール共和国の社会住宅を実現すべく、勤労者の健康を考えた住宅団地で、松と白樺を配置し、住宅は芝生の庭を持ち、採光に配慮し、十分な住棟間隔を取った。また通風にも配慮した。住宅平面は僅かに2種類のものであるが、これを組み合わせて住棟造りと都市計画を行っている。

森の住宅団地と称しているように他の住宅団地(Siedlung)に比べて圧倒的に樹木が多い。現在出かけて行っても住宅団地内を走り回るりすをしばしば目にすることが出来る。ブルーノ・タウトはベルリンの東北40㎞ほどにあるコリーン(Chorin)という小村を好み1903年から翌年にかけての冬、ここに数週間滞在し、同好の仲間と芸術論を交わしたり写生を行っている。滞日中にもコリーンを思い出し日記にも記述しているほどである。1934年8月27日の日記(篠田英雄訳、岩波書店)[2]を採録する。「快晴、敏子さんが達磨寺の近辺を案内してくれた。四囲の山々はこれまで見たことも無いほどはっきりした輪郭を示している。もっと遠方にはこれも山頂まで惜しみもなく露わした浅間山の偉容。敏子さんは浅間山は私の父、榛名山は私の母だという。田舎ばかりで育ったというのに利発な娘さんだ。コリーンの娘たちを思い出した。寺の近くには敏子さんだけが心得ているさまざまな小道がある。…」とある。ここのコリーンの娘たちとは村で本業は鍛冶屋であるが、下宿屋と酒場などを経営していたヴォルガスト(Wollgast)家の娘たちでやはり大変に利発で店に出ていたそうである。

ブルーノ・タウトは娘たちの一人ヘートヴィッヒ(Hedwig Wollgast)と1906年に結婚している。タウト26歳のときであった。また後にブルーノ・タウトの弟マックス・タウトもヘートヴィッヒの妹、マーガレッテと結婚している。ブルーノもマックスもコリーンのスケッチを多数残している。写真3にブルーノ・タウトが1903年に描いたコーリンのスケッチを示す。写真4はオンケルトムズヒュッテの現在の住宅団地であるが、この樹木は正に写真3と一致する。オンケルトムズヒュッテの設計に当たってタウトは造園建築レーバレヒト・ミッゲ(Leberecht Migge)、マルタ・ヴィリンクト・ゲーレ(Martha Willingd-Göhre)の協力を得ているが、頭の中にはタウト青春の地、コリーンの森をここで再現しようと考えたのであろう。ブルーノ・タウトは1933年にナチス政権を逃れて来日するが、日本では希望する職には就

写真3　ブルーノ・タウトが1903年に描いたコーリンのスケッチ[3)]

写真5　コリーンの村に残るWollgast家が経営していた鍛冶屋

けず、仙台国立工芸指導所嘱託等として工芸の指導を行っている。建築家タウトが工芸の指導が出来たのもコリーンで義父が行う鍛冶屋の仕事を鋭い観察眼で見、覚えたことによる。コリーンの村に残る妻の実家ヴォルガスト家が経営していた鍛冶屋を**写真5**に示す。

2．アルゼンチン通りの住宅
(Argentinische Allee)

地下鉄駅オンケルトムズヒュッテのすぐ傍の集合住宅で、タウトの設計により第一期工事(1926年～1927年)として竣工したものである。外観は青色、薄い緑色に着色されている。窓枠は赤く彩色されアクセントを添えている(**写真6**)。十分な隣棟間隔が保たれ白樺と松が植えられている。その1階に住まわれるKさん宅を拝見させて頂いた。ドイツ人の住宅を訪問するとまず家の隅から隅まで案内をしてくださるということが多い。Kさん

写真4　オンケルトムズヒュッテの現在の住宅団地

写真6　壁は青色、薄い緑色に着色、窓枠は赤く彩色（アルゼンチン通りの住宅）

宅も例外ではなく寝室、厨房、トイレ、収納庫まで拝見させていただいた。とても日本人の生活では出来ない芸当でいつも感心するものである。**写真7**に客間兼居間を示す。とても1920年代に建設された住宅とは思えない、現在の住宅展示場にある居間のようであった。それ程ドイツ夫人は常時室内の整理整頓、清掃に時間を費やしている。

写真8に第2の居間を示す。ここには大きな柱が見えるが、これは構造用の柱ではない。この住宅の建設当時はカッヘルオーフェン(kachelofen)と呼ぶ陶製の暖房器具で暖房を行っていた。その煙突が現在では飾りの柱として残っているのである。カッヘルオーフェンでは石炭、練炭、薪が燃料として使用され、その煤により建物が汚れたそうである。タウトが建物に彩色を施したのも、煤による汚れをカムフラージュする為であったという説もある。カッヘルオーフェンと煙突の関係を**図2**に示す。カッヘルオーフェンは1970年代に大方撤去され、運転が楽な温水暖房に代わった。地下室の収納庫を拝見させていただくと、ここには"Als Schutzraum geeignet

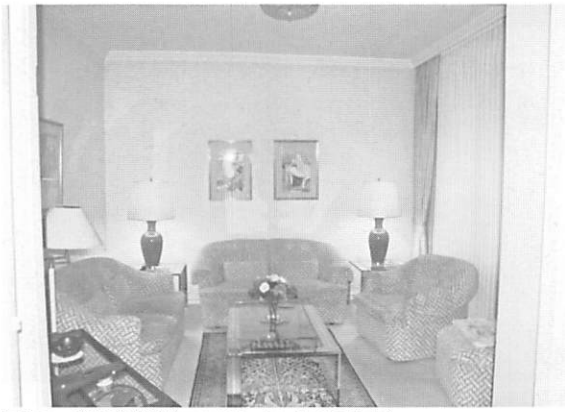

写真7　客室兼居間(アルゼンチン通りの住宅)

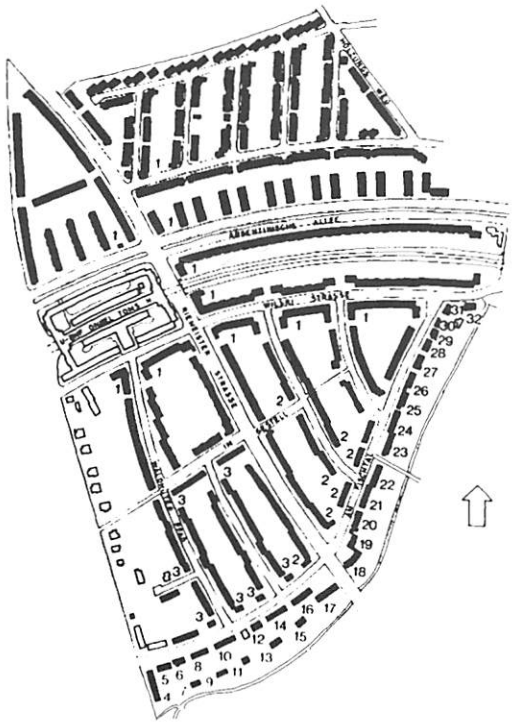

図2　森の団地オンケルトムズヒュッテ住棟配置図

für 15 Personen"(15名用の防空壕として適する)と朱書され(写真9)、ベルリンが1990年に東西ドイツの併合が行われるまでは東西冷戦の最前線にあったことを思い出させるものであった。

各住戸の玄関は階段室に面している。階段室に入るには外部扉があり、外部から訪問先のブザーを押し、訪問の用件を告げて各住戸から外部扉の解錠をしてもらうシステムになっている。階段室から各住戸への玄関扉の枠はタウト調に赤い派手な彩色が施されている(写真10)。

写真8　第2の居間(カッヘルオーフェンの煙突が飾り柱として残る)

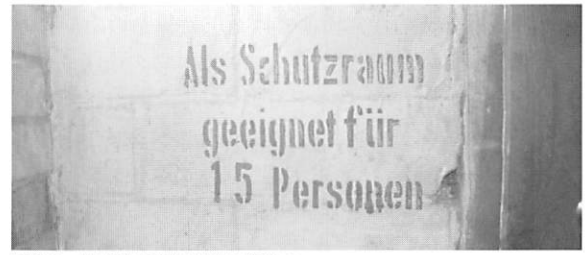

写真9　地下室の収納庫(15名用の防空壕として適すると朱書)

写真10　階段室から各住戸への玄関扉

写真11　階段の手すり

そこの階段の手すり部分は黒、転落防止用の金属パイプは赤とやはりタウト調の派手な彩色である(写真11)。

写真 12　低いフェンスで仕切られている各住戸の細長い庭

写真 14　各住戸に設けられた駐車スペース

3．アイスフォーゲルヴェーク(Eisvogelweg)の住宅

アイスフォーゲルヴェーク(Eisvogelweg)はオンケルトムズヒュッテの住宅団地では地下鉄線路の南側にある。駅から徒歩5分程度の場所にある。この街区はタウトの指示の下、フーゴ・ヘーリング(Hugo Höring)が設計を行っている。ここでは地上3階建て、地下1階のメゾネット方式で建てられている。地上の3階部分は、かつては単なる収納スペースであったが、現在は断熱技術も向上し改修が行われ、居室として使用されている。各住戸は細長い庭を持ち、隣家との境界は極めて低いフェンスで仕切られている(写真12)。こうして庭が広く拡がっているように見せている。1階は厨房と居間があり、居間の外にはサンルームが付属している。1階玄関の扉を開け、反対側の庭に面する扉を開けると風は住居を貫通して流れ、夏の通風が確保される。

タウト設計の住居の階段は一般に急勾配である(写真13)。また踊り場が無い場合が多い。子育て時代の両親には良い住宅であるが、高齢者にとってはやや住みにくいというのが実情でなかろうか。地下室は暖房用ボイラや冷凍庫、洗濯機などが設置されている場合が多い。収納スペースにも当てられている。建物の外側は薄い青に彩色されている。また1920年代に既に自動車の普及を想定していたのか、各住戸に駐車スペースが設けられ、歩道と車道が分離されている(写真14)。

写真 13　室内の急な階段

4．パパガイ(おうむ)地区の住宅

オンケルトムズヒュッテの森の団地にはおうむ地区という愛称で呼ばれる非常に派手な彩色、コントラストの強い配色を施した住戸群がある。これは団地の北側のほぼ中央に位置しており、アム・ヘーゲヴィンケル通り(Am Hegewinkel)とホーホジツツヴェーク(Hochsitzweg)に囲まれた地区である。ここの住戸を写真15に示す。ど

写真 15　パパガイ(おうむ)地区の住宅

写真 16　比較的小規模の住戸

写真 17　リーマイスター通りの住棟

の住戸も窓枠は赤く彩色されている。ブルーノ・タウトは色彩の建築家、色彩建築の巨匠(Meister des farbigen Bauens)と呼ばれているが、特にこの地区の建築を指して呼ばれているものと考えられる。

5．その他の有名建築群

オンケルトムズヒュッテ、森の団地は特に大きな住棟からだけで成立しているのではない。比較的小規模の住戸も混在している、特にこれらは北側の団地に見られる。その例を**写真16**に示す。リーマイスター通り(Riemeisterstr.)の住戸も黄土色に彩色され、前面道路がゆるやかにカーブしているところからそれに合わせるようにして建っている(**写真17**)。また団地内の交差点では拡幅を広くし、車の交差を容易にし、また見た目にも安心感を与える心遣いがなされている。筆者が1970年代初頭にベルリンに滞在し、武基雄先生をこの団地にご案内した事を記述した。当時武先生が放心状態で立たれたのが、実はこのリーマイスター通りの住戸であった。

オンケルトムズヒュッテ団地の地下鉄駅東側出口の近くアルゼンチン通りに面してブルーノ・タウトの顕彰碑が建てられている(**写真18**)。「建築とは調和の芸術である」と書かれ、左側には日本に滞在したことを含めて経歴が、右側にはタウトの横顔が彫られている。第一次世界大戦で敗戦国となったドイツ、周辺の戦勝国から払いきれない賠償金を突きつけられ、犠牲となったのは労働者であった。そこに社会主義的思想で労働者の健康を配慮し均等な住宅群を作ったブルーノ・タウトはトルコで客死し、ドイツに戻ることは出来なかった。しかし、現在の団地住民からも敬愛された建築家であったことが分かる。この顕彰碑の近くの建物には「このジードルング(団地)は1926年から1931年の間にゲハーグ(GEHAG)により建設された」と記された住戸がある(**写真19**)。

写真 18　ブルーノ・タウトの顕彰碑

写真 19　ゲハーグ(GEHAG)により建設されたと記された住戸

＜参考文献＞

1）田中辰明，柚本玲：ユネスコの世界文化遺産に指定されたベルリンのブルーノ・タウト設計による住宅団地：建築仕上技術：Vol.34, No.401 (2008／12)　p.49-54
2）ブルーノ・タウト著，篠田英雄訳：日本タウトの日記：岩波書店(1975)
3）ワタリウム美術館編集, Manfred Speidel：ブルーノ・タウト 桂離宮とユートピア建築：オクターブ(2007／05)
4）田中辰明：建築家マックス・タウトの業績と生涯：建築仕上技術：Vol.34, No.400 (2008／11)　p.76-81
5）水原徳言：Bruno Taut年表：群馬県工業試験場(1987／6／1)
6）Annete Menting Max Taut Das Gesamtwerk DVA：Deutsche Verlags-Anstalt GmbH(2003)
7）Manfred Speidel：Ich liebe die japanische Kultur：Gebr.Mann Verlag Berlin(2004)
8）Ausstellung der Akademie der Künste vom 29. Juni bis 3. August 1980, Bruno Taut(1880-1938)
9）Winfred Brenne：Bruno Taut Meister des farbigen Bauens in Berlin：Deutscher Werkbund Berlin e.V. (Hg.)(2005)
10）田中辰明，平山禎久，柚本玲：ブルーノ・タウト(Bruno Taut)の作品と建築設備の変遷：空気調和・衛生会論文集：No.136(2008)　p.1-5